

平成 22年 3月 31日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520718
 研究課題名（和文）
 沖縄県宮古島地方の祭祀劣化映像資料のデジタル化と文化政策的活用方法の研究
 研究課題名（英文）
 Digitization of Deteriorated Film Materials of Rituals in the Miyako Region
 of Okinawa Prefecture and Study of how to Utilize them in Cultural Policy
 研究代表者
 狩俣 恵一 (KARIMAT KEIICHI)
 沖縄国際大学・総合文化学部・教授
 研究者番号：60169662

研究成果の概要（和文）：

本研究の成果は、宮古島の劣化した祭祀映像資料をデジタル化すると共に、それらの映像資料をもとに、途絶えた祭りや衰退した祭りを復活・活性化することを現地の人々と共に話し合ったことである。具体的には、劣化映像資料を246枚のDVDに納めることができたこと。そのDVDを使って、2007年11月24日に「宮古の祭りの伝承」・2008年11月22日に「狩俣集落の祖神祭り継承」・2009年11月22日に「伊良部島佐良浜の祭祀の現状と課題」のシンポジウムをそれぞれの地域で行ったことである。

研究成果の概要（英文）：

As the result of this study, we digitized deteriorated film materials of rituals in the Miyako region and talked with the local people about the revitalization of extinct or endangered rituals on the basis of the film materials. Concretely, we were able to digitize the deteriorated film materials onto 246 DVDs. Using these DVDs we held the following symposia in the local places concerned: 'The Transmission of the Miyako rituals (Nov. 24th, 2007)', 'The Succession of the Uyagan Ritual in Karimata Village (Nov. 22nd, 2008)', 'The Present Situation and Problems in the Rituals of Sarahama, Irabu Island (Nov. 22nd, 2009)'.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2007年度 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |
| 2008年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2009年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| | | | |
| 総計 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：民俗学

科研費の分科・細目：文化人類学

キーワード：祭り・映像・芸能・信仰・歌謡

1. 研究開始当初の背景

宮古島及びその周辺離島の祭りを概観すると、多良間島の八月踊りは活気に満ちている。祈願の行事はほとんどなく、歌三線の踊りあり、組踊りありの多良間島の八月踊りは、誰でもが気楽に見ることができるので、島外からも大勢訪れる祭りとなっている。

それに比べて宮古島・伊良部島・来間島・池間島・大神島の祭りは、綱引きやクイチャー踊りなどを行う祭りを除けば、比較的静かである。というよりもむしろ、衰退化の道を歩んでおり、なかには途絶えた祭りもある。その大きな理由は、長い詞章の神歌を暗誦することの困難さがあり、社会状況が変化した現在、後継者となるべき女性たちが神歌を覚えるのは非常に難しいと言われている。つまり、心から神歌を歌うという意識が薄れ、祭りそのものが楽しいものではなくなっているようである。また、祭りに参加する人々の時間的・経済的な負担が大きいことも、祭り衰退の要因となっており、土曜日・日曜日に行われぬ祭りが多々あるため、公務員や会社員などが参加できないという問題も抱えている。

そのような状況の中、宮古島の佐渡山安公氏が1977年以来、撮り続けてきた8ミリ及びVHSビデオが大量に保存されている。しかし、その劣化は激しく、ビデオテープに傷が生えたり、テープが傷ついたり、切れたりしている状態であった。

要するに、宮古地方には、劣化した映像と、衰退した祭り・途絶えた祭りの世界が残されており、劣化した映像資料をデジタル化し、衰退した祭りの活性化、途絶えた祭りの復活をはかるための基礎的な調査研究が必要であった。

2. 研究の目的

本研究では、宮古島の劣化した祭祀映像資料をデジタル化すると共に、それらの映像資料を祭りの継承や復活に向けて活用する方法を研究することであるが、伝統文化の精神性を失うことなく継承することについて調査研究する。

特に注目するのは、宮古地方の祭祀映像資料である。本映像資料は、秘儀性の強い宮古島市の祭りを、郷土研究家の佐渡山安公氏が21年間（1977年～1995年）に亘って地元の方々との厚い信頼関係のもと、記録撮影したものであるが、8ミリテープ及びビデオテープの劣化が激しく、緊急にデジタル化する必要に迫られている。

よって、本研究の目的は、宮古地方の劣化

したビデオをデジタル化する作業を進めることを第一とし、そのデジタル化した映像を使用して現地集落での観賞会を開き、現地の祭りの参加者が、神歌及び祭りの重要性をどのように考えているか、また現代における祭り存続の意義をどのように考えているかという意識を探ることで、宮古地方の祭り継承の問題について調査研究を行うことにある。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するためには、宮古島及びその周辺離島の人々との密接な交流が必要であり、宮古島はもちろんのこと、沖縄県・本土の研究者との相互の意見交換が必要であると考えた。そして、宮古島の佐渡山安公氏と話し合っ、本研究を推進するため、宮古伝承文化研究センターを設立し、その所長の佐渡山安公氏に依頼して、佐渡山氏自らが撮影した8ミリテープ及びVHSテープをデジタル化する作業を行ってもらうことにした。

また、デジタル化された映像を使って、現地の祭りの中心となっている方々や、そのOBの方々と交えて、宮古島市平良、狩俣集落、西原集落、伊良部島前里添集落で、現地の主な祭りの映像観賞会を行い、またシンポジウムを行って、現地の人々の伝承意識を探り、研究を進める。

4. 研究成果

【劣化映像のデジタル化作業】

1997年以来、佐渡山安公氏が撮り続けてきた宮古地方祭祀の劣化映像資料を、279枚のDVD（約219時間30分）にデジタル化することができた。地域的には、狩俣・島尻・大浦・西原・伊良部島佐良浜・池間島・久松・川満・来間島・宮国・新里・野原・砂川・友利・比嘉・宮野・高原・伊良部島・多良間島であり、年代的には1977年から1995年の撮影が主となっている。そして、そのDVDの主な内容は、次のようなものである。

狩俣集落の収録された映像は、全体で約82時間である。ウヤガン（祖神祭）の映像がもっとも多く、ジープバナウヤガン・イダイスカーン・アーブガー・トゥディアギ・マンサンなどで、その他、夏プーイ・龍宮ニガイ・シマフサラ、旧1月16日祭の男衆のニリー・トゥクルフン・マンチダミニガイ・アーイスママ（豆の豊作祈願）・マンツダミ・ピンツソーズ（神の道清掃）などがある。

島尻集落の映像は、ウヤガン・パーントウ・ユークイなどで、大浦はマストウリヤ・

ズッコモイ・龍宮ニガイ、西原はユークイ（世乞い）・トゥマイニガイ・ウフユダミ・シーヌウパツ（芋の願い）・ムラダミニガイ・カーニガイ（井戸の願い）・インギョニガイ・ミヤクヅツなど、伊良部島佐良浜は、ヒダガンニガイ・イトゥニガイ・インギョニガイ・世乞い・カーニガイ・ミヤクヅツ、伊良部島池間添と前里添のヒダガンニガイ・ンマユイ・シーヌウパツなどである。

池間島は、ンマーユイ・旧正月ニガイ・マビトウダミニガイ・カリユシニガイ・ミヤクヅツなどで、久松の世乞い、川満のンナフカ・龍宮ニガイ、来間島の龍宮ニガイ・ヤマズブナカ、宮国のンナフカ・ウブユードミ・大綱引き・ファイバナ・雨乞いクイチャー・ナツファニガイ・ウサギンナフカ・ザグルニガイなど、新里は、シツニガイ・ナガイムトゥニガイ・ユークイ・豊年祭りなどで、野原はマストゥリャー・パーントゥ・サトゥパラウなど、砂川はナーパイ祭・豊年祭り、友利は綱引き・ユークイ、比嘉の二十日正月、宮原の飛鳥御嶽ニガイ、高野のシツブナカ、伊良部島のビヤーズウタキ芋ニガイ、伊良部島佐和田のユークイ、多良間島のシツブナカなどの映像を収めてある。尚、映像リストの詳細は別にまとめてある。

【祭りに対する伝承者意識の調査研究】

第1回目は、2007年11月24日、宮古島市平良の県立図書館分館において、地元関係者の方々及び研究者が集まり、デジタル化した映像の観賞会と、「宮古の祭りの伝承」というテーマでシンポジウムを開催した。しかし、その場所は旧平良市の市街地ということもあって、集落レベルの祭りの人々は少なく、地元研究者と県外研究者が多かった。したがって、映像の観賞会では、研究者及び部外者の視点で発言されることが多く、宮古島の祭りの力強い継承を願う発言が目立った。また、祭りの伝承者及び女性の出席は少なかった。

第2回目は、2008年11月22日、宮古島市の狩俣集落センターにおいて、映像観賞会と、「狩俣の伝承世界」というテーマでシンポジウムを開いた。狩俣集落は、祖神祭が中止され、現在行われなくなっているだけに、デジタル化した映像観賞では、かつての祖神祭に参加した高齢の女性たちの反応が大きかった。友人や自らの若かりし頃の映像、亡くなった先輩方の映像には懐かしいという発言が多数あり、自ら神歌を歌い出す者もいた。映像を見ることで、祖神祭の神歌の世界が鮮明な記憶として立ちあらわれてきたようである。そのせいだろうか、シンポジウムの際にも、秘儀とされていた祖神祭の神歌を歌ってくれた。また、地元出席者のほとんどが年輩の女性で、しかも祖神祭を継承して

きた高齢者が多かった。男性の出席者は公民館長1人で、彼からは祖神祭の復活を希望する旨の発言があった。

第3回目は、2009年11月21日に宮古島市西原公民館、22日に伊良部町の前里添多目的共同施設で、それぞれデジタル化した映像の観賞とシンポジウムを開いた。西原集落と前里添集落は、それぞれユークイの祭りを継承しているが、祭りの後継者問題が深刻な地域だけに、映像を見て懐かしがるよりも、祭りにおける現実的な経済負担や人員確保についての話題が中心であった。

また、西原公民館では、地元出席者のほとんどが年輩の女性であった。男性の出席者は公民館長1人で、彼の発言はなかった。そして、伊良部島の前里添集落でも男性の地元出席者は、公民館長1人であったが、祭りの運営及び収支については公民館長が責任を持っているとのことで、公民館長は、祭りの運営について発言された。

以上の他、個人的に会ったツカサ（司）をはじめとする女性たちや、区長や公民館長などの男性たちの祭り及び芸能関係者と個人的な調査を行ったが、これら宮古島及び周辺離島の祭りの衰退について、次のような原因があるとの指摘が多かった。

「祭りの神事性と秘儀性は密接に繋がっており、祭りはその秘儀性ゆえに、人口の減少や社会的環境の変化と共に、その継承が困難になってきた」ということであった。しかしながら、それら秘儀性の強い祭りは、宮古島市狩俣の祖神祭だけではなく、八重山地方の赤マタやマユンガナシなども秘儀性の強い祭りである。そして、その特徴は、神口・神歌を中心にした祭りであると同時に、祭りに参加する者が限定されていることである。また、祭りに登場する神は、ある場所で人から神に変わるのだが、その変わる場はもちろんのこと、「誰が神に扮しているか」を問うことをタブーとしている。

確かに、そのような秘儀的な祭りでは、よそ者である第三者が参加することを拒み、限定された参加者だけで祭りを執り行ってきた。しかも、神口や神歌を中心としているので、パフォーマンス的な要素は小さい。それゆえ、祖神祭は、人口の減少と社会環境の変化、あるいは継承者の意識の変化によって衰退し、継承されなくなると考えられる。

一方、それとは逆に、比較的公開性の高い祭りは、綱引きや芸能などのパフォーマンスが中心であり、観客に見られることを前提とした祭りである。例えば、芸能の総元締めの「長者の大主」や芸能観賞ために登場する「弥勒神」に、秘儀性はなくオープンである。そしてその祭りでは、大勢のよそ者や第三者が鑑賞することが期待される。しかも、芸能を中心にした祭りは大勢の人々が参加する

ので、祭り継承の危機という問題が話題になることはきわめて少ない。例えば、八重山地方の竹富島の種子取祭や小浜島の結願祭、沖縄本島北部各集落の村踊り、宮古地方多良間島の八月踊りなどは力強く継承されている。また、一時は中止となった八重山地方黒島の豊年祭、那覇市の大綱引きなどは、その公開性とパフォーマンスゆえに復活し、継承されるようになった。

そのように考えたとき、確かに神口や神歌を中心にした秘儀性の強い祭りは衰退化し、公開されるパフォーマンスを中心とした祭りは力強く継承されるという傾向がうかがえる。しかし、秘儀性の強い祭りでも力強く継承されている祭りがある。

先にあげた八重山地方の石垣島宮良・西表島古見・小浜島・新城島の赤マタ及び石垣島川平のマユンガナシの祭りがそうであり、神聖視され、秘儀性の強い祭りであったとしても、過疎化の中、その継承が危機に瀕することなく、力強く継承されているのである。なかでも、新城島は、口数名の超過疎化の島であるにもかかわらず、赤マタ・黒マタが登場する祭りでは、島には帰省者が溢れ、300名を越える人々が祭りに集う。

そして、そのような元気な祭りをを行っている集落を調査すると、応対してくれる人は男性がほとんどである。これまでに挙げた石垣島川平集落のマユンガナシでも、多良間島の八月踊りでも、応対してくれる人はほとんど男性であり、それらの祭りは男性中心の祭りとなっている。

ところが、本調査研究における映像の観賞会やシンポジウムの地元参加者はほとんどが女性であった。地元参加者のほとんどが高齢の女性であった理由は、宮古地方では、女性中心の祭りと男性中心の祭りに分かれており、女性中心の祭りの衰退や中止が話題になっているからである。しかし、男性たちは、一部の好事家や研究者を除けば、女性中心の祭りにはほとんど関心を示さず、集落の役職者である公民館長や区長が女性の祭りに関与している程度である。しかも、祭りに関与する公民館長の立場は、それぞれの集落で異なっており、伊良部島前里添集落のように公民館長が祭りの資金調達及び会計の責任者になることはほとんどない。狩俣集落・西原集落のように公民館長は、お手伝い程度にすぎない。そのせいだろうか、祭りの継承に危機感を抱き、その復活を望むのはほとんど高齢の女性たちであり、男性の無関心が目に付く。

以上のことから、本調査研究で明らかになったことは、宮古諸島だけでなく、八重山地方や、沖縄本島及びその周辺離島における祭りにおいても、力強く継承されている祭りは、男性中心の祭りである。したがって、祭りは、

その秘儀性ゆえに衰退するとか、人口の減少や社会的環境の変化の波に押されて、継承が困難になるというような一義的な結論は性急に過ぎるように思われる。

つまり、宮古島をはじめとする沖縄の祭りにおいて、中止や継承の危機がクローズアップされるのは、女性中心の祭りであるということである。しかも、そのことは宮古島にかぎらない。既に中止となった久高島のイザイホーも、女性の祭りであった。

ところで、なぜ女性中心の祭りにおいては、その中止や継承の危機がクローズアップされるのだろうか。それを考えるに当たって、折口信夫が、男性と女性の視点から、祭りに登場する神の演劇化(芸能化)という視点で、次のように述べていることは興味深い。

神人が祭りのとき神としての待遇を受ける。それを常識的に考へると、演劇を行つてゐるのである。然し、それをやつてゐる人は神の真似とは思つてゐない。村々には神になりきつてゐる人と、神を現実に見てゐる人とがある。その人たちを次第に常識の世界に入れて何処の誰が神の所作をしたといふ事を言ひ出し、たゞ昔は神の噂をすると禍を招くといふので、神を神としてお互に信じ合ふ礼儀を守つてゐた。然し、次第に世の中が進んで矢張り神の所作でない部分が現はれて非神的になつてきた。

沖縄ではかうして女の神職があつたつてきたものを神聖視し、男のあつたつたのを演劇化してしまつた。本土も沖縄も演劇の起源をなすものは男である。女から始つた演劇といふものは日本に無い。

(「過去及び将来における沖縄の宗教と芸術」折口信夫全集 34)

要するに、折口は、女の神職による神は神聖視されつづけ、男が扱つた神は芸能化すると述べているが、その真意は、信仰に根付いた神聖視される神は女性中心の祭りに存在し続けるが、男性中心の祭りでは演劇的な祭りへと変化しやすいということである。

換言するならば、演劇的な要素の濃い祭り及び、芸能を中心とした祭りは、公開される傾向にあり、人々を呼び集める力が強くはたらくので、大勢の人々の関心を集め、継承しやすい環境ができるということである。

筆者は、かつて拙著『南島歌謡の研究』において、マユンガナシについて、次のように述べたことがある。

- ① マユンガナシが唱える神口には沖縄本島の首里言葉が使われている。
- ② マユンガナシの神口で、神の来歴を唱える部分は竹富島の種子取祭の舞台で、芸能を始めるに当たって、仲筋ムラのホンジャーが唱える口上と表現が類似している。

- ③ マユンガナシの唱える神口は、「稲が種子アヨー」などの生産叙事歌謡の構造と類似している。

以上の指摘は、マユンガナシの神口が、歌謡や芸能の要素を取り入れたものであり、マユンガナシの神口そのものに芸能性を認めていることでもある。また、筆者は、新城島の赤マタ・黒マタが登場する場面、あるいは村びととの別れの場面は、歳月をかけて見事に演出されたものであるという印象を強く持っている。

要するに、筆者は神聖視されるマユンガナシや赤マタ・黒マタの来訪神そのものにも、芸能化された神の姿を認めているが、そのことは、折口が述べた「本土も沖縄も演劇の起源をなすものは男である。女から始つた演劇といふものは日本に無い」という考えに共鳴するものだと考える。

換言するならば、男性の祭りに登場する神は芸能化するので、それを見る人々は信仰心と共に、演出された神の登場に大きな感動を得ることになる。そして、その演出が進展すると、信仰心は次第に薄れ演出された神の存在よりも、演技する神の芸能そのものに関心を抱くようになるということである。したがって、先述したように、マユンガナシや赤マタ・黒マタは、演出された神として見做してよいと思う。

ところで、筆者は、男性の祭りが中止や衰退ではなく、継承される傾向にあることについて、もう一つの理由があると考えている。その第二の理由とは、一般的に現実志向の男性は、経済的な視点を重視するので、祭りの継承と現実の生活が乖離したと認めたとき、祭りの継承を希望しなくなるという傾向にある。例えば、狩俣集落の女性の祖神祭が中止された後、それに関連する男性の祭りも行われなくなったが、そのことはそれほど問題になっていない。共同体社会を運営し、現実の生活を第一とする男性たちには、伝統的な祭りの復活や継承よりも、現実の仕事や経済が優先されるからである。言い換えるならば、伝統的な信仰心や祭りの感動が薄れ、祭りの必要性を感じなくなったとき、男性はあっさりとして祭りを止めてしまうことに同意することであるが、その理由は、琉球では女性が祈願をし、祭りの中心的な存在であったのに対し、男性はいつも祈りの周辺に位置していたからであると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 狩俣恵一「沖縄の海の文芸—竹富島の祭りの歌と芸能」(『三色旗』NO735、慶應義塾大学出版会株式会社、2009.6)

- ② 狩俣恵一「沖縄の死生観」(『国文学 解釈と観賞』939、ぎょうせい、2009.8)
③ 狩俣恵一「乞食者詠と八重山のユングトゥ」(『万葉古代学研究所年報』第8号、財団法人奈良県万葉文化振興財団 万葉古代学研究所、2010.3)

〔学会発表〕(計3件)

- ① 狩俣恵一「沖縄における近代化と伝統芸能」(協定3大学研究所 国際学術シンポジウム、於 浦添市てだこホール(小劇場)、2008.11.29)
② 狩俣恵一「沖縄の婚姻の歌謡と民俗」(シンポジウム「前近代東アジアにおける婚姻の社会史」、協定研究所 国際学術大会、於 韓国全南大学校 湖南学研究院、2009.11.27)
③ 狩俣恵一「琉歌の世界」(國學院大學文化講演会、於 國學院大學、2010.1.23)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

狩俣 恵一 (KARIMATA KEIICHI)
沖縄国際大学・総合文化学部・教授
研究者番号：60169662

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし